

5年 わたしの地図活用

水産業の学習で 輸入水産物について調べる

東京都 日本女子大学附属豊明小学校 桑原 正孝

1 はじめに

第5学年「水産業のさかんな地域」の学習では、わが国が世界有数の水産業のさかんな国である一方で、漁場の変化や水産資源の減少などの問題を抱えており、養殖業や栽培漁業といった生産量を安定させるための工夫に加え、水産物の輸入が増えてきたことについても学ぶ。とくに輸入水産物について扱う場面は、小学校社会科の学習において世界地誌を扱う貴重な場面であり、次期学習指導要領でさらに重要視されるESDの視点を取り入れた授業実践が可能である。

高学年では、扱う内容が児童にとって身近な所から離れていくイメージをもたせると、興味が薄れてしまうが、手元に地図帳を広げ、スーパーマーケットで購入した水産物を目の前にして調べ、考える授業を展開できると、教材と児童とのかかわりが深まり、多面的・多角的な学びへとつなげていくことができる。

2 単元計画例（7時間）

| 時間 | 学習内容 |
|----|-------------------|
| ① | 水産業のさかんな日本 |
| ② | 沖合漁業のさかんな銚子港 |
| ③ | 漁港から食卓へ |
| ④ | 遠洋漁業のさかんな焼津港 |
| ⑤ | 漁港別の生産量の変化と水産物の輸入 |
| ⑥ | 水産資源と私たちの生活 |
| ⑦ | 水産業の未来 |

この単元計画例では、輸入水産物について調べる場面を第5時、第6時の授業との関連でもたせることができる。

例えば第5時で、教科書にあるような漁業別の生産量の変化と水産物輸入量の変化のグラフを比較して、漁場の変化や水産資源の減少などの原因から遠洋漁業や沖合漁業の生産量が大きく減っていきていることを考えさせる。そのうえで第6時の前に、世界有数の魚を食べている日本ではそれをどのように補おうとしているか、児童自身に、実際の食卓やスーパーマーケットの店頭で並んでいる水産物、給食の食材等を調べさせる実践をした。

3 食品ラベルから輸入水産物を見つける

第6時では、水産資源と私たちの生活について考える授業として、児童自身がスーパーマーケットの店頭で並んでいる水産物を見たり、保護者とともに購入したりしながら食品ラベルを集めるなかで、輸入水産物に注目し、それがどの世界のどの地域から届けられているかを調べる授業を行った。



図1 スーパーマーケットで発見できる産地情報の例

スーパーマーケットでは、例えば左の写真のようなインド産バナメイえびの食品ラベルや特売品として並ぶパック詰め前の冷凍えびの入った段ボールを見かけることもある。これらに記載されている産地の情報を利用して、授業では『楽しく学ぶ小学生の地図帳』（以下、地図帳）のp.55～56①「アジア」を使用し、「私たちが普段食べているえびはどこから届いているのだろう」と問いかけた。



図2 『楽しく学ぶ小学生の地図帳』 p.55～56①アジア

すると、児童はインドという国名を探し、チェンナイという都市の南に「えび」の産物記号を見つける。さらに「ほかにもえびのマークがのっているよ」といった言葉があがり、タイやベトナム、インドネシアの沿岸に記載されているえびの産物記号を見つけていくことができる。このように授業で確認した地名や産物記号に関しては赤鉛筆などを使用して印をつけたり、小さな付箋にメモをさせたりして学習の記録として残しておく、児童の記憶に残りやすくなり、その蓄積が児童にとっても学習の励みになるようすが見られた。

4 地図帳を活用してESDの視点を取り入れた多面的・多角的な学びを進めよう

地図帳を利用すると、小学校第5学年の水産業に関する学習もESDの視点を取り入れた授業実践へと広げていくことができる。例えば、先ほど児童に印をつけさせたえびの産物記号の分布について、「アジアの中でもえびの産物記号はどのような地域に多いでしょう」と問いかけると、児童からは「日本の南の方に多い」「赤道の辺りに多い」といった反応が返ってくる。この場面で、同様に第5

学年の内容である地球儀の学習で扱った赤道について、地図帳のp.51②「緯線と経線」でも確認し、アジアのなかでの赤道の位置を確認する。

さらに、「なぜ赤道付近でえびの生産がさかんなのだろう」といった新たな問いが生まれ、児童自らが多面的・多角的な学びに向かって動き出す。児童は赤道付近の気候が関係しているのではないかといった予想をあげ、食品宅配のチラシの中に、もともと塩田のあった場所や農業に適さない場所でえびの養殖が行われているという産地情報を見つけたり、マングローブ林がひらかれてえびの養殖池がつけられたりすることを調べてくる。そこで児童にマングローブ林の面積の減少の推移がわかる統計を提示すると、その統計にある国々の位置を調べ、さらに地図帳p.75の「世界の国別統計」でミャンマーから日本への輸出の項目を見ると「えび」の記載があることを見つける。このようにして地図帳を活用すると、マングローブ林の減少という地球規模の自然環境問題と私たちの食生活がかかわっていることに気づき、これからの食料生産について考える学びにつなげることもできる。

5 まとめ

このように、地図帳は教室と世界をつなぐ扉と考えると、単なる世界地図として知識を習得することにとどまらず、自分の手元にある情報から地球規模の諸課題に目を向けさせ、持続可能な社会づくりにつながる多面的・多角的な学びに誘う重要なツールになるといえる。

【参考文献】

村井吉敬『エビと日本人Ⅱ－暮らしのなかのグローバル化』2007 岩波新書